



哺乳に關する二三の事項

堀 七 藏

嬰兒がお乳をのむことは本能であります。唯が教へたこともなく、また少しの練習なしに親の乳房を探します。またこれを口にくくませますと吸乳の働作をするものであります。このことは吾人類に限つたことではありません。凡ての哺乳動物に共通のことでもあります。生れて一時間位の仔牛が親を探し、親の方にヨチ／＼と歩いて行きます。勿論眼がよく開いてゐるのでありますから、臭で親の居るところを感知するのであります。またお乳をのまんとする目的で親をさがすのでもありません。只本能的に親牛に近づく。親牛に近づけば、その腹の下にもぐり込みます。産後でまだよく腹痛が回復せず、後産の下りるので時々腹痛を催す場合でも、親牛は仔牛のためには只その爲すが儘にして居ります。

仔牛は切りに親牛の乳房のあたりを探がすのでありますが、そのうちに乳房が口に觸れますと彼は

吸ひつきます。勿論手際よく吸ふことが出来ず、またお乳が出ないやうであります。反覆乳房に吸ひつきます。

かくて仔牛は遺憾なく捕食の本能を示し、親牛も亦授乳の本能を發揮するのであります。御承知の如く人類でも嬰兒は眼がまだ開かないにもかゝはらず、若し親が乳房を彼の口にふくませますと見事に吸着きます。また親は授乳によつて本能の満足が出来ます。若し吸乳の本能が嬰兒になかつたならばどんなでありませうか。鳥類のやうに固形食を本能的にとることの出来ない嬰兒が餓死することは實に明白ではありませんか。嬰兒が吸乳本能を有することは實に重要なことで、たとへ親に授乳の本能が缺けてゐても、親の生命には關係ないかも知れないが、嬰兒の生命は實に吸乳本能にかゝつてゐるのであります。それでこの吸乳本能は更に進歩して捕食本能となりますが、食慾と捕食の方法は本能的に生命と共に得てゐるのであります。

二

本来「胃は何をするものか」をよく理解しない母親は、嬰兒の本能を無視することになり、その結果嬰兒の生命を間接ではありませうが、失はしめることが多いのでありませう。一體胃は食物を溜めて置く袋であります。食物を消化する働もあります。それよりも食物を溜めて置くのが胃の重大な使命であります。鳥類でも哺乳類でも皆胃は食物を溜めて置く役目のものであります。御承知の牛で

は胃が四個あつて、大急に敵のゐない間に捕食したものを第一第二の胃に溜めて置きます。そして敵の來ない所でゆつくり噛み直すのであります。所謂反芻するので有名でありますが、人類の胃は牛の胃とは大に違ひます。反芻するのでないから、胃が四にも分れてゐる必要がなく、縦になつたゴムの如き袋であります。大人では一・五立所謂胃擴張といふ病氣にかゝつてゐる人では二立以上も入りませうが、嬰兒などでは寧ろ袋といふ方が無理な位で、筋肉の太い管であります。食道と腸との中間にある稍々太い所が胃といつてよい位であります。

かゝる胃を持つた嬰兒には一時に澤山のお乳をのませることは無理であります。またお乳をのんだばかりの所を頭の方を低くしたり、また胸腹を押ししたりするやうなことをすればお乳を吐くのは當然であります。お乳をのませた後直に嬰兒をお負つたりすることの無情が、すぐわかるではありませんか。一回の授乳量はいふまでもなく嬰兒が乳房を自然に放すときであります。嬰兒は本能的に胃が空になれば飢餓を感じ、吸乳の働作を行はんとするのであります。多くは泣いてこの本能を表示する。また胃が満ちればそれ以上に吸乳せんとする欲望はない。「今うんとので置かねばならぬ」といふ欲望のない嬰兒は、自然に乳房を放すのであります。それを「これから何をするからお乳をのませる譯に行かぬ。サア澤山ののんで置きなさい」などと自然に放した乳房を更に嬰兒の口に含ませる母親があれば嬰兒の胃を乞食袋とでも間違たものでありませう。かくしては消化不良を起さしめ、可愛ゆくて

たまたぬ我兒の首を間接にしまつてゐるものでありませう。

三

曾つて北陸線で旅行したとき、汽車中で見た事實を想起するのであります。まだ年若き一婦人が生れて四五ヶ月位の可愛い嬰兒を抱いて私の隣に座席を占めました。二等が相應に込んでゐたので、特に私が席を譲つた位でありましたが、夫たる人は確かに立つて居りました。

兎に角漸く座席についたかの夫人は直に胸を開き、はつて來た乳房を嬰兒の口に當がつたのであります。勿論嬰兒は吸乳を欲してゐたのでありませうが、母親は坐つたからお乳をのませるといふ習慣からであつたとすれば、必要でないお乳をのませられる嬰兒こそ迷惑でありませう。どんなことでも泣くより外に發表機關を持たぬ、意志表示の方法を知らぬ嬰兒でありますから果して泣きました。心ある親は嬰兒の泣聲でその欲求の何たるを理解すると申します。お乳が欲しく泣くか、ねむくて泣くか、またどこか痛くて泣くか、その泣聲でよく分ると申しますが、經驗の乏しい若き夫婦では分りません。若き母親はお乳が欲しく泣くものとのみ思つて居りますから、太きな乳房を嬰兒の口に當てます。成程嬰兒は乳房に吸着きます。そして吸乳せんとするのでありますが、すぐに泣いて乳房を放します。放して泣きますから、若き母親は更に乳房を嬰兒の口に當てます。吸着くかつかぬにまた泣きます。嬰兒は泣き若き母親は乳房をふくませる。ふくませるとまた泣く。しかも火のつくやうに泣き

ますから、車内の視線はこの若き母に集りました。前に立つてゐる夫も勿論若き母を手傳つて嬰兒にお乳をのませんと苦心するのであります。隣席にゐた私はすまんとは思ひつゝもつい若き母親の動作に注意し、嬰兒の泣く有様を観察するに至つたのであります。そして「あかちやんの鼻の孔がふさがりますよ、乳房を一寸持つてふくませて御覽なさい。呼吸が出来ないで泣くのですから」と注意したのであります。「イイエねむいのですよ」と若き母親は返事しつゝも私のいつた如く乳房を指で押いてふくませてゐました。嬰兒は三十分以上も泣いた後で結構お腹がすいてゐたものと見え、また今度は大きな乳房で鼻孔を塞がれる心配もないので、喜んでお乳をのんで、五分もたゝぬ中に自然にねむつてしまひました。それで私は思つたのであります。「お乳をのませる母親はわが子のおながが空いたことを知り、またわが兒のねむくなつてゐることを感ずるが、わが兒が一瞬間も呼吸せずにはゐられないことを真に感得してゐるものが少い。さればこそ添乳して嬰兒を窒息させる實例に乏しくない、大きな乳首は嬰兒の口に一杯となり、大きな乳房が鼻孔を壓迫すれば泣くに泣かれず、もがくに手足は充分働かぬ嬰兒であることを真に理解せぬものではあるまいか。世の若き母親達よ。生物は一秒間も呼吸を停止することが出来ないことを三省すべきではないか」とつくづく感じたことがあります。今も思へば當時の光景が眼前に髣髴いたします。若き母親のお乳をのませんとする努力と汗、泣く嬰兒の苦痛と汗、ハラ／＼して立てる夫の態度。